

「ドストエフスキ研究会便り（１７）」

「様々な問いとの出会い」

芦川進一

★当「研究会便り」では前々回の第１５回目から、かつての講演や研究発表を原稿化して掲載していますが、今回と次回は２０１４年７月、東京大学宗教学科の大学院生の皆さんを中心とする「日本宗教思想史研究会」に招かれ、「様々な問いとの出会い」という題で行った小講演を掲載します。今回は全部で八つの問いの内、五つを扱います。

★地方の一少年が、祖父の死を契機として、如何なる問いを抱くに至ったのか、その過程で如何にして生涯の師となる小出次雄先生と出会い、また如何にしてドストエフスキと出会ったのか、そこから如何なる新たな問いと出会い、如何なる生と思案を迫られるに至ったのか——その主に三十歳代までの記録と報告です。

★しかし「記録」とか「報告」と言っても、私は六年前の小講演でお話したことの全てを、ここにそのまま記したわけではありません。六年という時間の経過の中で、またその時のメモを基に原稿化を進める中で、自分の過去に向ける視線は少なからず変化をしています。私の話を直接聞かれた方は、私が六年前と同じ問いとテーマについて、同じ順序で扱いながらも、取り上げるエピソードの濃淡や長短が変わり、大幅な加筆もしていることに気づかれ、むしろ同じテーマでの新たな講演とさえお感じになるでしょう。その方たちは、何よりもこの「差異」を味わって頂き、思案の材料として頂ければと思います。

★一方、初めてこれに接される方は、私が様々な問いを通して、人間と世界と歴史、またそれらを超える世界を理解しようとして、師に導かれつつ如何に半生を歩んだかの記録・報告として、講演とは関係なくお読み頂けるのではないのでしょうか。

★この小講演は、宗教学を専攻する大学院生の皆さんが対象ということもあり、主にドストエフスキと聖書を巡っての、私の宗教的認識の深化に向けた「試行（思考）錯誤」の足跡の報告となった点で、或る硬さもあると思います。この硬さは、キリスト教に関して我々日本人が示し続けてきた島国性に対して、若い皆さんへのアドバイスも兼ねて、私が様々な角度から疑問と問題を提起したことからも来るのだと思います。

しかし皆さんが、これらのことから離れて、二回に分けて報告する私の八つの問いとの出会いを、それぞれ独立したエピソードとしてお読み頂き、ご自身の経験と重ねつつ楽しんで頂けるならば、これこそ私の喜びとするところです。

「様々な問いとの出会い」(1)

目次	ページ
・ 参考資料(1) 公開講演会・パンフレット	3
・ 参考資料(2) — 話者からのメッセージ —	4

前半	
・ 「はじめに」	5
1. 「この炎を超えるものはあるのか？」	5
— 祖父を燃やす炎 —	
2. 「東京には何があるのか？」	9
— 「田舎」と「都会」、そして「田舎者」 —	
3. 「猿を聞く人、捨子に秋の風いかに？」	14
— 芭蕉の一句との出会い —	
4. 「この混沌とは何なのか？」	18
— 高度経済成長期の日本、「大学闘争（紛争）」の中で —	
5. 「神はあるのか？ 不死は存在するのか？」	22
— 「ロシアの小僧っ子」と「聖書」との出会い —	

《付》	
・ 小出次雄略歴	30
・ 参考文献	31
・ 次回「ドストエフスキイ研究会便り(18)」について	32

後半 (次回・目次)	
6. 「今ここの絶対のリアリティを掴めているか？」	
— 恩師との散歩、突きつけられた問い —	
7. 「何が現実を変え得るのか？」	
— 社会を向こうに置いて —	
8. 「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」	
(「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし?」)	
— 十字架上のイエスの絶叫 —	
・ 「おわりに」	

参考資料（１） **〔講演会のパンフレット〕**

日本宗教思想史研究会 公開講演会

ゴルゴタへの道 ―ドストエフスキと日本人―

日時 平成 26 年 7 月 20 日（日）14 時～17 時

会場 東京大学本郷キャンパス 学生支援センター 3F ディスカッションルーム 2

講師 芦川 進一氏（河合文化教育研究所研究員）

盛夏近づく梅雨空の候、皆様におかれましてはご健勝のことと拝察します。

本研究会は、「日本宗教思想史」という視座の下に文献講読と論議を重ねることを目的に、2011 年 3 月に発足致しました。知識の多寡や経験の差異を問わず、自由闊達な質問と応答が繰り返される場となっております。これまでに、本居宣長、白隠慧鶴、福沢諭吉、丸山眞男、遠藤周作、清澤満之など、興味深い宗教思想的テーマを提示する著作に正面から取り組んできました。また最近は、東北大学日本思想史研究室とのジョイントゼミナールなども行われ、活動は一層拡がりや深まりをみせております。

本研究会では、ゲストスピーカーをお招きし、現代日本の重要問題についてご提題頂くことに致しております。今回は、一貫してフョードル・ドストエフスキ（1821-1881）と聖書の関係を研究されてきた芦川進一先生にお話し頂く運びとなりました。

世界の文学や思想において、自らの人生を決定するほどの衝撃を与える「ドストエフスキ経験」がしばしば語られます。西欧近代に不可避免的に飲み込まれた歴史や社会では、人間の肉体と精神は次第に病み傷つき、ちっぽけでどうしようもない「自己」は解体を余儀なくされる——ドストエフスキは、そうした血生臭い危機を解き明かすカギを、イエスがその命を賭した「ゴルゴタへの道」に求めます。そしてドストエフスキの激しく厳しい問いは、古今東西に影響を与えてきました。近現代の日本文学やカント以来の西欧哲学はもとより、資本主義 vs. 社会主義の超克とその後の世界を構想する近代社会論、自己の認識と「分裂」の問題を扱う精神分析、キリスト教と仏教の近代的な受容から新たな死生観を模索した日本宗教思想史など、その分野は枚挙に暇がありません。いわば我々は生きている限り、“既に”ドストエフスキ的磁場に招き入れられており、「ゴルゴタへの道」という問いを突きつけられています。

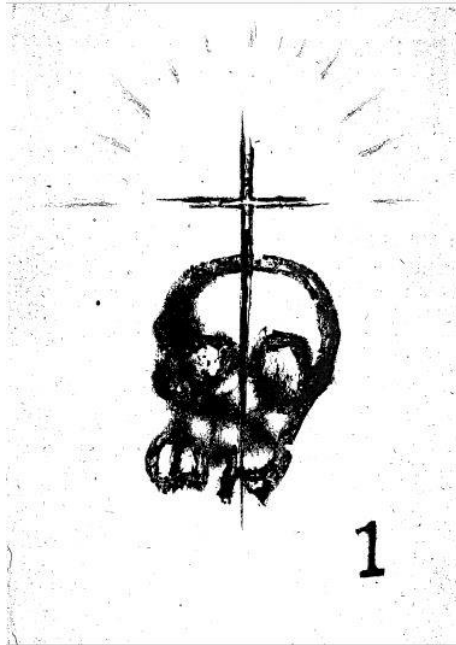
ドストエフスキのこうした影響力と重要性については、芦川先生の近著『ゴルゴタへの道―ドストエフスキと十人の日本人―』で詳述されています。ドストエフスキの宗教的境地と日本文化の宗教や芸術（芭蕉や親鸞や西田哲学など）を比較し、それらがご自身の決定的な問いとなって宗教的・芸術的認識が覚醒されてきた有様を語られています。今回は、西田幾多郎（1870-1945）門下の哲学者・小出次雄（1901-1990）に出逢って以来、社会、大学空間、そして師や先哲たちと交わりながら決定的な問いと苦闘した若き時代を振り返り、その思索の原点が形成されてきたプロセスについて、御講演頂きます。

参加は無料です。ご関心のある方はどうぞお気軽にご参加下さい。

日本宗教思想史研究会 飯島孝良

参考資料（２）

[以下は前ページのパンフレットに掲載された私（芦川）の師
小出次雄先生のペン画と、私からのメッセージです]



雑誌「^{ゴルゴタ}聖體」Ⅰ 表紙
1949年2月発行

— 話者からのメッセージ —

様々な問いとの出会い

ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』において、イワンが弟のアリョーシャに語ります。「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。（中略）そういう連中が、飲み屋でわずかな時を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるのかとか、不死は存在するのかとかいう世界的な問題なのだ」（第五篇三章）。二十代始め、イワンのこの言葉に出会った時の衝撃が忘れられません。ひたすらマモン（金銭）の神を追い求め高度経済成長からバブル経済への道をひた走る日本、メタ・フィジカルな問いを受け容れる土壌のないこの社会において、イワンの言葉は遠い異次元の世界の響きを持つと同時に、不思議な牽引力も持って私の心に飛び込んで来たのでした。

「神はあるのか？」「不死は存在するのか？」。その後この問いをめぐって私が辿って来た試行錯誤の道。それは私を導いて下さった師と先哲たちとの出会いと、そこで新たに与えられた様々な問いとの格闘の過程でもありました。この日本において「ロシアの小僧っ子」であることは如何に可能か、あるいは如何に困難か。このことについてお話しすることが、学問の道に踏み出しつつある皆さんの何らかの参考となるならば、また皆さんと私との世代を超えた議論の叩き台ともなるならば幸いです。

芦川 進一

「様々な問いとの出会い」(1)

「はじめに」

今日これから何度もお話することになる私の恩師小出次雄先生の思想については、拙著『ゴルゴタへの道』(新教出版社、2011)で紹介しておりますので、まずは今回のテーマである「問い」との関係で、一つのエピソードの紹介から入らせて頂こうと思います。

先生が既に最期の床に就かれていた1990年の夏のことです。病室ではまずは安静をと思い、出来るだけ静謐を心掛けていた私に、突然先生から問いが投げかけられました。

「芦川君、何か話す問題はないか？」

私の頭は真っ白になってしまいました。咄嗟のことで、「問題」など何も浮かんで来ないのです・・・暫くして沈黙を破り、先生がポツリと言われました。「君は問題というもの、問いというものを持たないのかね?」。続いて言われました。「クウェートに侵攻したフセインはその後どうした?」「世界は、日本は、これからどうなるかね?」。この時のことを思い出すと、恥ずかしさと無念さで、私の胸は張り裂けそうになります。この時「死」に近かったのは先生ではなく、私だったのです。

今日は私の様々な問いとの出会いについて、ただの「昔懐かし」的な回顧談などではなく、師の厳しさを前にして、お話をしなければと思っています。よろしくお願いします。

以下、全部で八つの問いとの出会いをお話しさせていただきますが、当然今私自身の内では、それらが時系列的にも意味的にも一連の強い繋がりを持ったものとして思い出されています。しかし皆さんはそれら八つを、取り敢えずは一つ一つの独立した話・エピソードとして聴いて頂き、それらを皆さんご自身の経験と重ね、ご自身で構成し直して頂くのがよいのではないかと思います。そこに各人の新しい「思索」と、お互いの「対話」の可能性も自然と生まれるのではないのでしょうか?

1. 「この炎を超えるものはあるのか？」

— 祖父を燃やす炎 —

焼き場での経験

「はじめに」でお話をした「問い」に関する辛い思い出、恩師の死の床で私と与えられた

「試練」は、四十歳代初めのことです。これに対して、私の人生に於ける問いとの最初の出会いは小学校六年生、十一歳の夏のことでした。より正確には、その問いの基となる経験をしたのは十一歳の時だった言うべきでしょう。それは祖父の「死」に関わるものでしたが、この時の私には、その経験を「問い」として明確に言語化することは出来なかったのです。

長い間結核を患っていた祖父が死に、その夜の内に火葬場に運ばれました。当時この病は不治の伝染病として恐れられていて、市役所も死亡当日の火葬を許可したのです。翌朝には祖父の寝ていた隠居に保健所の消毒班が到着し、徹底的な消毒が施されました。悲しい手際の良さでした。夜の火葬場には親族が駆けつけ、慌ただしく別れの儀式がなされ、火葬ボイラーの点火となりました。ボイラー係りのおじさんが、点火口のある裏の部屋に喪主の父とその息子の私を呼び入れました。ボンという爆発音と共に点火がなされると、父は皆のいる遺族待合室に帰って行ったのですが、係りのおじさんは何故か私をそのまま薄暗い部屋に留まらせ、祖父が焼かれる一部始終を火力調節用の窓から眺めさせたのです。

この炎の経験は余りにも強烈なものでした。しかし未だ十分に目覚め切れていない私の意識の「閾」の狭さが、この強烈さに対して「安全弁」として働いたからなののでしょうか？ 或いは私の意識下のどこかに、この焼き場の光景を一旦「強制終了」させてしまうようなメカニズムがあったからなののでしょうか？ 勿論この光景を忘れることはなかったのですが、その後の数年間、私はこの光景を正面から受け止めることはなく（と言うよりは、受け止め切れずに）、概して田舎の平凡で呑気な中学生としての生活を送ったように思います。

「文学青年」の二つの経験

焼き場での経験が改めて強く甦ってきたのは、高校進学後のことでした。地方の「受験校」に進学した私は、ここを覆う小市民的なエリート意識に馴染めませんでした。この反発心の目覚めと、青春の血(?)の目覚めと、祖父の死の思い出などからでしょう。(小出先生のことは後でお話をします)。私は少々神経症的な「悩める若者」になり、常に一人であることを好み、様々な文学作品を読み漁るようになりました。「世界文学全集」や「日本文学全集」が次々と出版されていた頃です。そのような中、高校二年生の時、私は「文学青年」的な「読書経験」を、懼ろしさと感動との相反する方向で、与えられたのでした。

一つは、鴨長明の『方丈記』と与謝野晶子訳の『源氏物語』を続けて読了した時のことで、私は海の潮が一斉に沖に向かって引いてゆくように、突然自分と世界の存在一切が、目に見えない引き潮のようなものによって何処かに連れ去られてゆくような感覚に襲われました。この時私はこの感覚に、高校の授業や私の読書から得た知識で、「無常感」という言葉をあてたのですが（「無常観」よりも「無常感」と言う方が自然に思います）、この「無常感」というものがただ受験用に暗記すべき重要単語ではなく、現実のリアリティを持って存在することを実感させられたのでした。この感覚は今も私の心の底を、大きな引き潮のようにゆっくりとゆっくりと流れ続けています。また私はこの時、「無常感」という言葉が、あの焼き場で与えられた感覚と通じるものであることも感じたのでした。

もう一つは、『新約聖書』が切っ掛けとなった経験です。高校を訪れたギデオン教会の方が、受験にも使えるからと生徒全員に英和対訳の新約聖書を配布されたのです。生まれて初めて『聖書』というものを手にした私は、好奇心であちこちのページをめくっていました。「イエス」とか「十字架」とか「キリスト」とかいう言葉は、その時の私の意識には入って来ませんでした。しかし偶然ヨハネ伝の内に「永遠の生命」という言葉を見つけると、そこで私の目と手は止まってしまいました。「生命」というものを「永遠」という角度から見て表現すること、これは私には全く初めてのことで、田舎の「文学青年」は新鮮な感銘を与えられたのです。この言葉をノートの端に何度も何度も書き写しながら、私はこれもまた祖父を焼いた炎とどこかで通じることを感じていたのです。

「無常感」と「永遠の生命」。これら二つは異質な、と言うよりは全く相反する感覚・感情でした。一方では、全てが引き潮のように死に向かって流されてゆくという懼ろしい感覚。他方では、死を超えた「永遠の生命」が存在するということへの新鮮な驚きと感動——これら二つは混沌のままに、不思議な響きと力を以って私の心を揺さぶり、共に私の意識を新たにあの祖父を焼いた炎に向かわせて行ったように思います。そしてこれら二つの経験と、それらから与えられた両極的な感情・感覚の混沌に明晰な言葉を、しかも「問い」の形で与えて下さったのが小出次雄先生だったのです。

小出次雄先生との出会い

ここで私の師小出次雄先生との出会いについて、ごく簡単ですが説明しておきます。先生の略歴はプリントに記しておきました(→ 30ページ)。

祖父の死んだ年が明けて正月のことです。両親は息子が中学に進む前に、予め英語に慣れさせておこうと、小出先生が開いておいでだった英語塾に通わせ始めました。先生のご家族三人は疎開後貧困の底に陥り、生活と研究生活の継続のために、数年前に英語塾を開かれたのです。しかし先生は当時の進学状況には無頓着で、町にもう一つあった大きな進学塾とは違って、英語だけしか教えられませんでした(専門の哲学との関係で、先生の代数・位相幾何学の知識は相当のものでしたが)。つまりここは学校の予・復習と英語カルタをするだけの、また祖父以来のクリスチャン家庭としてクリスマスを盛大に祝う、「変わり者の学者先生」が教える「町の英語塾」でしかなかったのです。しかし意識がまだ眠り続ける田舎坊主の私にとっても、他の腕白坊主たちにとっても、中学生時代に毎週二回先生の許に「塾通い」をし、英語カルタに熱中することは楽しく、今思っても掛け替えのない三年間でした。

ところが高校クラスになると、先生の授業は一変し、この上なく厳しいものになりました。さすがに呑気だった田舎坊主の私たちも、これは今までの中学校時代とも、自分たちが通う高校とも異質な空間だということをハッキリと気づかされたのです。改めて見回すと、分厚い書籍類や原稿類が、幾つもの部屋や廊下の至る所に山のように積み上げられているではありませんか。そっと覗いた或る部屋の壁には、先生が描かれた油絵やデッサンがかけられていました。いつの間にか「町の英語塾」は、土曜夜の授業後、その日読んだ英

文について、ベトナム戦争について、国内や地元の公害問題について、政治の腐敗について、また各自の読書経験や恋愛について等々、生徒たちが様々な問題を先生にぶつけ、夜遅くまで語り合う熱気溢れた場となったのでした。私が何よりも驚かされたことは、我々がぶつける問いに対して、思いもよらぬ角度から、直ちに熱く明晰な答えが撥ね返ってくることでした。どこからこんな知識や言葉が出て来るのか、不思議でなりません。山のように積まれた分厚い書籍が、哲学・思想・宗教から文学・芸術に至るまで、高校の図書館に並ぶ書物とは全く異質の「専門書」というものであることも分かってきました。

そのような中で、受験を一年後に控えた頃、他の生徒さんたちと同じように、私も個人的に時間を割いて頂き、成績のこと進路のことから始めて、祖父のこと、「無常感」のこと、「永遠の生命」のことに至るまで、思い切り質問をさせて頂いたのです。それまでの五年間にわたる「塾通い」と、土曜夜の議論の積み重ねもあり、既に先生は私のことはよくご存じで（中学生の妹もこの「町の英語塾」に通っていました）、最後にこう言われたのでした。

「君のぶつかっている問題は、結局「永遠の生命」の問題だ。君がおじいさんを焼いた炎から受け取ったのは、「この炎を超えるものはあるのか？」という問いであり、更には「死を超えた永遠の生命はあるのか？」という問いでもある」

「この炎を超えるものはあるのか？」「死を超えた永遠の生命はあるのか？」—— このような問題を、私は大学のどこで学んだらよいのかとお聞きすると、先生のお答えは「哲学か宗教だろう」でした。先生が哲学者西田幾多郎の下で学ばれたことを知る私は、躊躇せずに哲学を選びました。その後私がドストエフスキとそのキリスト教思想の研究を専門とすることになった経緯については、この後の[4]と[5]で、また次回にも改めてお話をします。

経験の属するところ

祖父を焼いた炎から受けた衝撃が「この炎を超えるものはあるのか？」、更には「死を超えた永遠の生命はあるのか？」という言葉、問いとして結晶化するまで、私には約五年の時間が必要でした。しかもこれらの問いは、私自身の力でというよりは、小出先生によって最終的に結晶化され定式化されるに至ったものです。その途中で私自身、高校時代に文学作品を乱読したこと、そこから「無常感」と「永遠の生命」との出会いがあったことも事実です。しかしそれでもなお小出先生の英語塾終了後の、もう一つの熱い塾経験がなかったとするならば、そして先生との個人的対話がなかったとするならば、祖父の死の経験はこれら明確な問いにまで結晶化はしなかったでしょう。明らかに私の意識と認識力は、あの祖父を焼いた炎を抱えながらも、大抵は眠るような呑気さと平安の内にあったのです。

私には、ここに人間の経験というものの本質の一端が顕われ出ているように思われてなりません。つまり我々の経験は我々自身のものでありながら、実は同時に我々を超えたところに属するもの、更に言えば我々を超えたところで創られるもの、つまりは我々に与え

られるもののように思われるのです。ここには我々の意識とか自覚とか認識の在り方について、そして我々の存在自体の在り方について、重大な問題が潜んでいるように思われます。これを私の今日の問題提起の一つとして頂き、皆さんが考えるための手掛かりとして頂ければと思います。

2. 「東京には何があるのか？」

— 「田舎」と「都会」、そして「田舎者」 —

箱根山の向こう

私の故郷は静岡県の三島です。伊豆半島の付け根、田方平野の北端に位置し、北を富士山と愛鷹山、東を箱根連山、南を天城連山、西を低い沼津連山と駿河湾に囲まれた風光明媚な土地で、住人の性格も概しておっとりとしたもので、「静岡」という県名そのままの、穏やかな土地柄だと言えるでしょう。

この三島の町外れで育った私は、物心がついてから東に連なる箱根の山々をよく眺めるようになりました。理由は簡単です。箱根の向こうには東京という大都会があることを強く意識するようになったのです。日本経済は高度成長期で、「所得倍増」のスローガンの下に、大会社が工場を次々と各地に建設し、テレビがどんどん普及してゆき、その中心地「東京」が、否が応でも幼い私の心に刻印されていったのです。小学生の頃、箱根から登る朝日を見ながら、「あの山の向こうの東京には何があるのか？」と、漠然と好奇心を燃やしていた自分を今もよく覚えています。

それから半世紀以上が経った今も、この「東京志向」は日本中の若者を捉え続ける願望であり、むしろこの傾向はその後更に強まり、今では東京への「一極集中」化が極まってしまった感さえあります。「猫も杓子も東京へ！」—— 私もまた、「東京には何があるのか？」と箱根を仰ぎ見る「田舎猫」の一匹だったのです。

「田舎」と「都会」

東京に出てきてから半世紀。僅かですが海外生活も入れて、この間私は自分の、更に広くは日本人の「田舎者性」ということについて少なからず意識をさせられ、考えさせられました。自分が「田舎者」であることの露呈を怖れたわけではありません。またいつの間にか「都会人」になった自分が、「田舎者」に優越感を覚えるということでもありません。この半世紀間の様々な経験が私に教えてくれたことは、「田舎」であれ「都会」であれ、「日本」であれ「西洋」であれ、およそ人間の本性に変わりはないということです。ナイーヴな優越感情を隠してなされる「田舎-都会」の比較対照論など、私には興味がありません。

しかし現実には我々が人間を考える上で、「田舎（者）」とか「都会（人）」という概念が、相当有効な判断基準として生きる場合が少なくないことも事実です。皆さんの経験でも、或る人がそのハイセンスさや教養や収入の多さや地位の高さなどで注目を浴びていても、その人のどこかに違和感を覚える場合、「田舎者」という言葉を当ててみると、サッと一瞬にして全てが了解されてしまうこと、いわゆるその人の「素性」がばれてしまうという経験があるのではないのでしょうか？ 私の場合も「田舎-都会」という対照枠が、人間や世界や歴史について考える上で、究極ではなくとも、相当程度有効な frame of reference（思考の基準枠）となってきたことは事実であり、何時、何が自分にそのような思考の枠組、価値観を与えることになったのか、しばしば考えています。そしてこの時常に突き当たるのが小出先生と私の父と母、これら三人の存在です。「田舎-都会」という対照枠を、また「田舎者性」という思考の基準枠を私の内に刻むことになった三人について、「東京には何があるのか？」という問いと共に、振り返ってみたいと思います。

be 動詞の二相、存在論と認識論

先にも述べましたが、私が小出先生の英語塾に通い始めたのは祖父の死の翌年、中学入学の数か月前のことでした。その一回目か二回目の授業でのことです。新聞の綴じ込み広告の裏にペンで「be」と書かれると、先生は私たちに「be 動詞」の説明をされ始めました。

「君たち、be 動詞には‘我、在り’という‘存在の be 動詞’と‘我は～なり’という‘説明の be 動詞’との二つがあるのだよ。前者が哲学の「存在論」、後者が「認識論」に対応する。このように be 動詞というものは、人間の最も根本的な二つの相を担っているのだよ」

「be 動詞」「存在論」「認識論」「相」—— 小学校六年生の「田舎坊主」の頭に、こんなことがどうして理解出来るのでしょうか？ しかし今も私の脳裏には、広告紙にペンで書かれた「be」という文字と共に、この時先生が語られた「認識論」と「存在論」という言葉が鮮やかに生きて踊っています。この時、何かが私の胸に突き刺さり、何かが始まったのです。

三十年前、先生が亡くなられた直後、私は基本動詞の多義性をまとめた学習参考書を出版したのですが、冒頭でこのエピソードを紹介し、次のように記したのでした。

「この時、私は be 動詞そのものが持つ不思議な多義性への好奇心から、更に言葉というもの、人間というものが持つ奥深さと神秘を垣間み、その感動に触れていたのだと、今改めて振り返り思うのです」

（『芦川の英語基礎貫徹ゼミ—多義動詞—』河合出版、1990）

この本の出版から更に三十年が経った今も、この時の私の驚きと感動に変わりはありません

せん。「田舎-都会」の対照、そして人間の「田舎者性」ということについて考えようという時に、まずこのようなエピソードと文章を取り上げたのは、小出先生の許で与えられた驚きと心の躍動が、六十年・三十年という時間の経過とか、三島と東京、日本と海外の間の空間的移動などとは全く関係がなく、むしろ自分にとっては時間・空間の原点であり核であり続けたということを確認しようとしてのことです。つまり先生の「be 動詞」の説明にポカンと口を開けて聞き入っていた時間と、小学六年生の心の震えのみが生きて脈打っていた空間——これらを前にすると、年齢の高低とか性別、教育の有無、国の違いや時間の経過等々は消えて、更にまた私が東京に出てきて以来身に着けた、そして人々が持つ、「田舎-都会」とか「田舎者-都会人」とかの対照枠、また「田舎者性」「都会人性」などという判断の基準枠も、全く入り込む余地などないもののように思われてくるのです。

「田舎者!」、炸裂した雷

話が少々抽象的になってしまいました。ここで今まで私がお話をしてきたことと一見矛盾するように思われるエピソード——小出先生が「馬鹿者!」という言葉と共に、私の胸に「田舎者!」という言葉を押さめられたエピソードを紹介したいと思います。

先にお話をしましたが、中学校を卒業すると小出先生の英語塾の高校生クラスは、授業の厳しさとその後の議論で、緊張感と熱気の溢れる場に変化しました。しかし中学生クラスの方は、教科書の予・復習が済むと（あの「be 動詞」の延長線上で、決して授業のレベルは低くなかったのですが）、あとは英語カルタの争奪戦が中心となり、我々生徒も今日はカルタを幾つ獲得出来るかに夢中で、毎回楽しくのんびりとした雰囲気になっていました。好きなだけカルタ取りが許され、自由に菓子が食べられるクリスマスも楽しみでした。或る時私は、カルタ取りに熱中し過ぎて友人と悪ふざけをし、学習机の下に身を隠そうとして、床や壁際の至る所に積まれた先生の書籍類や、原稿の入った封筒の山を崩してしまいました。

「馬鹿者! 本や原稿に触るな! この田舎者!」

その後何度も何度も私に向かって炸裂した「雷」の、これが最初の一撃でした。誰よりも優しく紳士だった先生は、誰よりも激しい怒りの人でもあったのです。そもそも先生は、お亡くなりになるまで原稿類と書籍類を、と言うよりは一字でも文字の記された物は何でも、「聖遺物」のように大切にされていたのです。あの「be」とお書きになった新聞の折り込み広告一枚に至るまでそうでした。その原稿類や書籍類を悪ふざけして突き崩す田舎坊主に、「雷」が炸裂するのは当然だったのです。

猛烈な落雷の後、茫然とした私の耳の奥で「馬鹿者!」「田舎者!」という言葉が鳴り響き続けました。殊に「田舎者!」という言葉は、この時何故か強烈に私の心を打ちました。そこにあったのは、この一語で私の存在の全てが吹き飛ばされてしまったような懼ろしさと、触れてはならないものに触れてしまったという畏れの感覚だったように思います。勿

論明確には自覚されなかったのですが、これらの感覚が「田舎者！」という一語に凝縮されて、ヒリヒリとするような痛覚が私の耳と胸を刺し続けたのでした。

神田の古本屋街

この時以来、私はどんな原稿類や書籍類に対しても無条件の畏怖の念のようなものを抱くようになりました。今も神田の古本屋街を歩く時、私は不思議な感覚に領されます。御茶ノ水駅から明大通りの坂を下ってゆくと、「田舎のお上りさん」のように胸がときめき始め、靖国通りに突き当たると、自分が再び小出先生の空間に戻ったような懐かしさと緊張感に領されるのです。このような時、耳の奥に先生の「田舎者！」という一喝が甦ってきます。そしてこの一語が一瞬にして私の存在を焼き尽くしたことを思い出すと共に、私が改めて自覚させられるのは、「田舎」とか「都会」という言葉を超えた遙か先にあるもの、あの原稿類と書籍類の山の奥にあって、この神田の街の奥にも潜むもの、再び抽象的で大袈裟になりますが、敢えて言えば「真理」というものへの関心を、この一語が遠く目覚めさせてくれたのだということです。「田舎者！」という一喝は、「真理」に近づこうとしない者に向かつての「雷」の炸裂だった——今神田の古書街でしみじみと思うのはこのことです。

さて先生の「雷」の炸裂は私を先生から遠ざけたどころか、むしろ私は以前よりも一層熱心に「町の英語塾」に通い、カルタ取りに熱中するようになりました。先に「be 動詞」の説明が私に驚きと感動を与えたと述べましたが、この「馬鹿者!」「田舎者!」という「雷」の炸裂もそうで、先生の英語塾には私ばかりか「田舎坊主」たちにとり、不思議な魅力を持った時間と空間が脈打っていたのです。しかし実際には、一瞬の覚醒の後に来たのは、なお以前と変わらぬ田舎少年の日常であり、そこでは眠るように呑気な意識が流れ続け、至る所に山と積まれた先生の「本や原稿」の中身になど、私の関心は向かわなかったのです。

父と母、そして「田舎者」

私に「田舎」とか「田舎者」という言葉を意識させ、同時にその遙か向こうにあるものへの意識をも呼び覚まさせてくれる出発点になったのは、小出先生の「田舎者!」という怒りの炸裂でした。もう一つ別の角度から、私にこれらの言葉を強く意識させることになったのは両親であり、殊に父でした。しかし小出先生の場合とは違い、父が私に与えたのは我々が日常生活で使う「都会」とか「田舎」とか「田舎者」という言葉の、極めて普通の意味と価値観でした。そしてこれはこれで、世間というものが、また人間というものが如何なる価値観を宿して生きるのかを教えてくれた点で、少なからぬ意味を持つものでした。

父は三島の町外れにある大きなタイヤ工場の工員でした。タイヤやチューブの成型のため高熱となった作業場で働いていた父は、毎日疲れ果てて家に帰った後も、祖父が手に入れた畑に出かけ、家計の助けにと暗くなるまで働き続けていました。汗にまみれて働くだけの父、働いてさえいればご機嫌な父とは、母に言わせれば、「働くことしか能がない人」だったのです。また父に負けぬ働き者だった母は、父との静い時は常に「こんな人のこと

を田舎者と言うんだよ！」と罵っていました。これは今思うとなかなか含蓄ある表現で、改めて母に「田舎者」の意味を聞いてみたくも思うのですが、当時の私は母の罵りの中に怒り以上の意味は感じられませんでした。私にとり、ただただひたすら働く存在が父であり母であり、二人の内面に分け入ろうという気持ちなど持たなかったのです。両親の内にあったのは、息子と娘を東京の立派な学校に送り出すという、田舎の親ならば誰もが持つ夢であることは、私にもハッキリと感じられていました。しかし中学生の頃は眠るような意識の中に生きていた私は、高校生になると、先にお話をしたように、「受験生」というよりは「文学青年」気取りの若者となったのです。毎週土曜日の小出先生の塾が生活と意識の中心を占め、家では部屋で本を読みまくり、父や母を手伝うどころか、二人に目を向ける余裕も思いやりもなく、両親が子供にかかる夢も当然のように思っていたのです。私こそが「こんな奴のことを田舎者と言うんだよ！」—— 母の言う正に「田舎者」だったのです。

父と上司と「田舎者」

話が少し先に飛びます。

「田舎者」という言葉とその持つ厄介な毒性が、父を介して、新たに私の胸に強く刻印されたのは、私が東京に出てから後のことでした。工場の上役の方が、五十歳を過ぎて重労働の現場にいる父のことを気づかってくれ、タイヤ製造の現場から守衛所へと配置換えをしてくれたのです。実際には父の体力は相当のものでした。しかし筋肉質で痩せていて、目も落ち窪んでいたため、同情を買ったのだと思います。父は六十歳の退職時まで守衛として勤務をするのですが、肉体の酷使からは解放されたものの、精神的にはここで些か辛い時を過ごしたようです。人付き合いの苦手な父が、工場に出入りをする千人以上の従業員と顔を合わせ、場合によっては会話もしなければならないのです。ぶっきら棒な口しかきけず、「失礼な守衛がいる！」という苦情も寄せられたようです。

そうこうするうちに、どうにか仕事にも慣れてきた父は、工場の上司数人を社用車で駅まで送迎する仕事も任されるようになったのです。上司の方たちは単身赴任をしていて、普段週末には東京に戻るのですが、時にそのまま三島に留まることもあったようです。そのような時、時折父が呼び出され、車で箱根や伊豆巡りをさせられるのです。父にガイドなど出来るわけはなく、当初はひたすら運転に集中していたようです。しかし恐らく退屈紛れにでしょう、父は意地悪な質問をされるようになったのです。帰郷した私に、時折ボソッと父がそれらの質問のことを話してくれました——「新橋って、知ってる？ うちの本社があるところなんだけどね」「うちの会社の上の方は、慶応義塾大学の出身者が多たってこと、知ってる？」「慶応というのは、最初は日吉で学んで、その後は三田に行くのだけど、日吉とか三田って所、知ってるかな？ 三田会というのはどうかな？」—— 新橋も本社も上の方も慶応義塾大学も日吉も三田も三田会も、父が知るわけがありません。この上司たちは、父のその余りにも完璧な無知ぶりが可笑しかったのでしょう、ある時言ったそうです。「三島って、田舎だね！」。彼らにとり、父は紛れもない「田舎者」だったのです。

その後私は、このような人たちを生んだ大学や社会の歴史、そしてその構造やメカニズムもある程度は理解するようになり、彼らの「貧困」を心から気の毒に思うのですが、父からこの話を聞いた時は、怒りで身体が震えました。更にその後私はドストエフスキイと福沢諭吉の比較研究もすることになり、福沢のことはそれなりに知ったように思います。そして私の知る限りでの福沢、私の好きな諭吉は、このような学生が生まれたことを知ったならば、「この馬鹿者！ 田舎者！」と一喝し、自らの創った慶應義塾大学を一気に廃絶してしまうのではないかと思います。いずれにせよ父の話から私は、学歴と共に「田舎-都会」という対照枠が、我々人間が持つ基本的な思考と価値の基準枠であること、しかも優越心や差別心と結びついた実に厄介なものであることを痛感させられたのでした。その後私が大学院に進んだ時のことです。無口の父がまたボソッと言いました。「お前は、気取ったり、威張ったりするなよ」。父のため、敢えて記させていただきます。

「原点」としての二つの問い

父と母を通して教えられた「田舎-都会」「田舎者-都会人」などの、我々人間が普通に持つ対照枠、或いは思考と価値の基準枠。そして小出先生から与えられた「田舎者！」という叱責と、この言葉の背後に存在するものへの畏怖と懼れの感覚。これら相異なる「田舎」経験が、私の「東京には何があるのか？」という問いの背後に存在し、また東京に出てから私の人間観察における、唯一ではなくとも、大きな基準となったのでした。

この「東京には何があるのか？」という問い。また祖父を焼いた炎から与えられた「この炎を超えるものはあるのか？」という問い——これらは共に、小出先生の導きで明確化され、自分の内に生きて働く問いとなったのですが、これからお話しする問い、東京に出てから私が出会った様々な問いは、これら二つの問いを核として生まれ、そしてその延長線上にあるものと言えるでしょう。

3. 「猿を聞人捨子に秋の風いかに」 きくひとすてご

— 浪人時代に出会った芭蕉の一句 —

浪人生活の開始

東京での生活は「浪人生活」として始まりました。「東京には何があるのか？」という問いを抱えた私を、この都会はまずはその「混雑」を以って迎え、仰天させたのでした。

私が上京したのは1966年、その二年前には東京-大阪間に東海道新幹線が開通し、東京でオリンピックが開催され、日本は正に高度経済成長の道を突き進んでいる最中でした。道路には車と排気ガスが溢れ、「光化学スモッグ」が世を騒がせ、熊本に続いて新潟でも水

侯病の発生が確認され、間もなく新宿の空には高層ビル群が聳え立ってゆきます。団塊世代のはしりで、予備校の大教室には数百人の生徒がすし詰めとなり、有名講師がマイクでする授業は熱気に溢れていました。ラッシュ・アワーというものを初めて経験したのも、予備校への通学時のことです。この年にはビートルズが来日し、公演の場が予備校からそう遠くない武道館だと聞いて興奮したことも覚えています。私の予備校での一学期は、「田舎青年」が「都会」に圧倒された数か月であり、アッという間に過ぎ去ってしまいました。

芭蕉の「暗唱」

その夏のことです。久しぶりに田舎に帰り、浮足立っていた私に小出先生から「雷」が炸裂しました。しかしこの話はここでは省略します（→「ドストエフスキ研究会便り」「予備校 graffiti」⑥の最後に記してあります）

二学期、新たに気合を入れて机に向かうようになった私は、每晚三鷹の下宿から吉祥寺の井之頭公園まで、玉川上水に沿って散歩をし、この一時間余りの間に「暗唱」を試みることにしました。高校時代に様々な文学を読み耽った私は、古文と漢文はある程度得意だったのですが、一学期に手を抜いていたため、夏の模試で悲惨な成績が出てしまい、急遽芭蕉の『野ざらし紀行』と『唐詩選』とを、散歩ごとに一区切りずつ暗唱することにしたのです。この作業を半年近く続けると、芭蕉の俳文と発句の、そして漢詩の読み下し文の韻律が散歩の歩行リズムと一つになって、自分の内に沁み込んで来るような感じがするようになりました。その後私は予備校で教えるようになると、生徒さんたちに学習の大事な一手段として「暗唱」を勧めてきたのですが、これは浪人時代の暗唱経験が基になったものです（「暗唱」ということについても、このHP内「予備校 graffiti」の各所に記しています）。

この毎晩の暗唱が、私に新しい一つの視野を与えてくれました。つまり芭蕉の『野ざらし紀行』を全文暗唱したことで、私には入試古文への自信がついたと共に、少々大袈裟な言い方ですが、日本には一切を捨てて「旅」に生きるという文化的・宗教的伝統が存在することを教えられたのです。どこにも所属をせず、一人「一筋の道」に命を賭ける人間を「浪人」と呼ぶのならば、芭蕉こそ「浪人」であり、この自分もまた「浪人」の端くれとして、日本の文化的伝統の内にあるのだなどと勝手な理屈をつけて、一人で虚勢を張っていました。私は今も、高校時代の「無常感」の経験と共に、この俳諧という「一筋の道」に命を賭けた芭蕉という芸術家と出会ったことが、受験勉強に於ける最大の収穫だったと思っています。

「野ざらし」の旅

ご存知の方も多いでしょうが、『野ざらし紀行』とは、貞享元年（1684）、芭蕉が江戸から十年ぶりに故郷の伊賀上野に帰郷した際の紀行俳文集で、『甲子吟行』とも呼ばれますが、この旅は、前年世を去った母の霊を弔う旅でもあったのです。

冒頭に置かれた一句、

野ざらしを心に風のしむ身哉

母の死を向こうに置き、たとえ自分も旅に死して「野ざらし」(鬻・どくろ・されこうべ)となり果てようとも、俳諧「一筋の道」に生きようとの決意を表明した悲壮感溢れるこの一句は、心に強く響いてくるものでした。夏に小出先生から叱り飛ばされた経験が、私を新たに厳しい姿勢で浪人生活に向かわせていたこともあったと思います。東京で一人勉強をする孤独感や悲壮感、そのセンチメンタリズムが働いていたことも否定出来ません。いずれにせよ「野ざらしを心に」という、この句を貫く悲壮感がこの時の自分にはピッタリで、心の奥深くにまで沁み込んできたのです。ここからは自然、祖父の死のこと、そしてあの問いのことも思い出されてきました。今も私は、独特の短調的韻律を持つ『野ざらし紀行』と『唐詩選』を交互に暗唱しながら、玉川上水に沿って歩いている自分の歩調を、この身体の底に感じられるように思います。

「捨子」の句との出会い

「野ざらしを心に」、この句と共に私が強く胸を打たれたのは、芭蕉が富士川のほとりで詠んだ一句でした。前後の俳文も入れて紹介します。

富士川のほとりを行くに、三つ^{ばかり}計りなる捨子の哀氣に泣有。この川の早瀬^{はやせ}にかけてうき世の波をしのぐにたえず。露計^{つゆばかり}の命待^{まつ}まと、捨置^{すて置き}けむ、小萩^{こはぎ}がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすにやしほれんと、袂^{たもと}より喰物^{くひもの}なげてとをるに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝ち^{にく}ゝに悪まれたる^か坎、母にうとまれたるか。ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ、唯^{ただ}これ天にして、汝が^{きが}性のつたなきをなけ。

息子と会えぬまま故郷で死んだ母。道の辺に「野ざらし」となることを覚悟し、一切を捨て、己を「乞食^{こつじき}」の身に貶めて旅に踏み出した芭蕉。その彼が富士川のほとりで見出した捨子。この子が富士川の急流に呑み込まれるのを見るに忍びず、束の間でも命あれと川のほとりに捨て置いた親。捨子に食べ物置いて去る芭蕉。杜甫ら中国の古(いにしえ)の詩人たちに悲痛な問いを投げかけ、最後に捨子に呼びかける芭蕉——ここに込められた余りにも多くのものを受け止め切れず、私はただその悲劇性に胸を抉られたのでした。ずっと後に知ったのですが、芭蕉はこれより十年近く前にも、「霜を着て風を敷^{しき}寝^ねの捨子哉」という発句を作っています。ここにも捨子の現実をじっと凝視し、その悲しみに己の身を重ねる芭蕉がいて、読む者の胸を打たずにはいません。

当時ベトナム戦争はしだい次第に泥沼化の様相を呈していました。米軍が無差別に投下

する枯葉剤やナパーム弾によって親を殺された子供たちや、大怪我を負って血まみれで泣き叫ぶ子供たちの悲惨な光景が新聞やテレビで次々と伝えられ、人々の心を悲しみと怒りで引き裂いていたのです。ベトナム戦争とそれが現出する悲惨な現実、私のみならず当時の日本の若者たちの胸に重くのしかかる問題であり、やがて「大学闘争（紛争）」の一因となったのです（→[4]）。いつの時代にも世に満ちる幼な子たちの苦しみと涙。この現実には自分は何が出来るのか？ 杜甫ら古の詩人たちに「猿を聞人捨子に秋の風いかに」と問いかけた芭蕉。そして捨子に「唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ」と言い残して立ち去った芭蕉—— 彼がこの問題を解けているとは思えません。しかし誰が芭蕉を非難出来るのでしょうか？ まして浪人の自分の身に何が出来るというのでしょうか？ 芭蕉から、浪人時代から、私が受け取った厳しい課題がここにあります。

地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たち—— 大学への入学後、「大学闘争（紛争）」の混沌の中で、私はドストエフスキイと出会ったのですが、この時ドストエフスキイこそ、この問題を正面から取り上げる作家であることを知ったのです。そしてこれは今に至るまで私の胸を刺し続ける問題・課題となり、次回最後の[8]のイエスの絶叫・問いに至るまで、私の話のメインテーマとなるでしょう。

死の意識の拡がりから、再び原点の問いへ

もう一つ、ここで思い出し確認をしておくべきことがあります。この時私は「捨子」という現実の前に立たされると共に、芭蕉の母の死や、彼の「野ざらし」を覚悟しての旅立ちを始め、捨子を巡り何重にも張り巡らされた「死」のイメージにも強く心を動かされたのです。捨子と死—— 地上に生を受けたものが投げ入れられる運命、その悲劇的リアリティが芭蕉俳文の流れるような韻律に乗って私の内に沁み込むと共に、先に述べたように、自然に私には祖父の死と祖父を焼いた炎が思い起こされたのです。芭蕉を介して、私は改めて最初の問いに戻ったのです。高校時代、『源氏物語』や『方丈記』から押し寄せてきた「無常感」が心を離れることはありませんでした。これとも連なり、私は死を巡る問いが、そのまま広く人間に普遍的な、しかも喫緊の問いであること、死の問題こそが、古今を貫いて人間の文化・宗教の正に核心をなす問題であるという事実、芭蕉を介して新たに正面から向き合わされたのです。後のドストエフスキイやトルストイやハイデガーとの出会いとも繋がる、死の意識の拡がりです。

小出先生も手紙で、この暗唱の作業を強く励まして下さいました。この時私はまだ知らなかったのですが、先生が残された仕事には哲学・宗教関係の論考に加えて膨大な芭蕉研究があり、その中には『野ざらし紀行』の徹底的な考証も含まれていました（→[6]）。しかも中学生時代、私がふざけて崩してしまい、「馬鹿者！ 本や原稿に触るな！ この田舎者！」という「雷」が炸裂することになった原稿の山は、この芭蕉論の一部だった可能性が高いのです。ここでも私はいつの間にか、改めて自分の原点に連れ戻されていたのです。

かくして芭蕉が刻む一句・十七文字の世界は、ただ浪人生の受験知識の内に収められて

終わるところか、遠く中国の古典文学と連なり、更にはベトナムばかりか世界中至る所で流されつつある無辜の幼な子たちの血の問題とも繋がり、ひいては人間一人一人が必ずその前に立たねばならない死の問題にまで直結することを私は知らされたのでした。

そして祖父以来の死の問題との取り組みに於いて、私が決定的な一步を与えられたのがドストエフスキイとの出会いでした。これについてお話をするには(→[5](#))、その出会いに至る大学生活についてお話をしておく必要があるでしょう。

4. 「この混沌とは何なのか？」

— 高度経済成長期の日本、大学闘争（紛争）の中で —

「教育」の場について

私は日本の教育の現状、殊に大学の在り方に強い疑問を抱いています。大学が「レジャーランド」だと言われるようになったのは1970代から80年代にかけて、経済の高度成長期からバブル経済の到来にかけての頃だったと思います。しかし最近では、大学を果たしてこの呼称で呼べるのか、また呼ぶべきかについて賛否両論が渦を巻いているようです。人が大学を見る視座により、また大学での経験により、その大学観が大きく変わるのですから当然でしょう。私自身は、私の経験した限りですが、大学というものが本来純粋な学問研究の場であるとするならば、日本で今その役割を真に果たしている大学は半分も存在しないと考えています。その原因については様々に考えられ、今回私がお話していることも、先の小出先生の「英語塾」での「be 動詞」の話から始まって、芭蕉やドストエフスキイとの出会いも入れ、それへの答えの試みのつもりなのですが、一度に余りにも多くのことは語り切れません。大学に入学してから私が経験したことに沿って、この「教育」の問題を四番目の問い；「この混沌は何なのか？」という問いと重ねてお話をしたいと思います。

大学への失望

大学は東京外国語大学のフランス語学科に入りました(1968)。哲学を学ぶ土台としての語学習得のためです。しかし入学式で出鼻を挫かれてしまいました。[以下には母校や恩師に対して失礼に当たること、極めて主観的な表現が続くと思いますが、当然その責は私自身が負い、敢えて記させていただきます。最終的な判断は皆さんにお任せします]。何に出鼻を挫かれたかと言うと、学長の祝辞でした。「皆さんは、東京大学と共に江戸幕府の開成所の流れを引く本校、輝かしい伝統を持つ学問の場に入ったのです！」——このことを赤子に説き聞かせるかのように、延々滔々かつ得々と語り続ける学長に、心底愕然とさせられたのです。授業が始まって、私が学ぼうとしていた「永遠の生命」については無理だとしても、教壇に立つ教授・助

教授・講師たちに、人間の生と死について思索をしている雰囲気は感じられません。それが大学というものだ、そもそも自分はここに語学の勉強に来たのではないかと思ひ直しても、違和感と失望感は収まりません。では日本社会や世界が抱える問題についてはどうかと言うと、語学専門の大学ということもあったのでしょうか、自分の海外経験や語学力を嬉しそうに語る教師たちはいても、当時泥沼状態に入っていたベトナム戦争について、水俣病や光化学スモッグなどの公害問題について、また身近で進展していた東大・日大紛争について、学生たちに真剣に語りかけてくれる教師とは出会えませんでした。学生たちとは言う、キャンパスに満ちるのはサークルへの新入生勧誘、そしてコンパ勧誘のお祭り騒ぎでした。ここは調子の低い「混沌」の世界でしかない！—— 小出先生や芭蕉を通して、高校時代から浪人時代にかけて、私が想像し期待していた大学はどこにも見出せませんでした。

疲れ果てて下宿に帰る日が続きました。心を開くことの出来ない、また行動範囲の極めて狭い「田舎者」の「新入生」が、キャンパスを勝手に「混沌」と呼び、自らは何もすることなく、ただ不満顔をして徘徊していたに過ぎないではないか！—— こう言われれば、それまでなのかも知れません。しかしあの違和感と失望感は半世紀が経った今もなお鮮やかで、それらが「懐かしさ」の感情にまで昇華される時は、どうしても来ないのです。

暫くして私は思い直しました。「これは！」という鋭い眼力をもった学生を見つけよう！ そういう若者と出会ったら是非話を聞こう！ 私はキャンパスのあちこちを探し回り始めました。いわば「眼付け」ということが、誰に教わったのか、小さい頃から私の「悪ガキ仲間」発見の手段の一つだったのです。数日後に一人、異様に鋭い目つきをした学生を見つけました。その人は学生自治会の幹部の一人で、校門近くに置いた演壇上で「アジ演説」をしていて、その表情の内には「狂気」のようなものが認められたのです。「よし、これだ！」。私は演説が終わった彼の前に進み出て、暫く立ち話をさせて下さいとお願いをしました。

彼の口からはベトナムに於けるアメリカ軍の暴虐について、そのアメリカに追従する自民政権の腐敗について、更にその延長線上にある大学の教授たちの無気力と無能さについて、既に東大や日大で進行していた「闘争」について等々、立て板に水の如く「言葉、言葉、言葉」が迸り出てきました。しかしその雄弁さは紋切り型の定型句でしかなく、「狂気」が混ざったと思われた表情・目つきも、間近で見ると、こちらの胸を刺し貫く力を持つものではありませんでした。彼の目を見つめながら、私の脳裏には何故か「野心」という言葉が浮かんだことを覚えています。私は礼を言って去りました。その後私は彼の消息を耳にしたのですが、そこに認められたのは「野心」と言っても、世俗化した「野心」の延長線上を着々と歩んでいる彼の姿でしかありませんでした。

あっと言う間に一学期は終わってしまいました。夏休みが開けて起こった「大学闘争（紛争）」と、そこで出会った新たな「混沌」—— 以下ではまずこれらについて取り上げ、夏休みのことはその後でお話をしたいと思います。

「大学闘争（紛争）」

[これからお話をする「出来事」、いわゆる「大学闘争（紛争）」については、「大学闘争」と「大学紛争」という二つの呼び名があります。これと積極的に関わった人たちには「大学闘争」、或る距離を置いていた人たちには「大学紛争」という表現が馴染むのかと思います。一般には「大学紛争」と言う表現が定着しているようですが、ここでは両者を容れて「大学闘争（紛争）」と記します。私はこの表現を用いる時、これから記すように、「闘争」が「紛争」になってしまったという、複雑な負の思いを込めています]

二学期に入ると「大学闘争（紛争）」の波は東外大にも押し寄せ、学生たちによって教師たちは大学から締め出され、あっという間にキャンパスは封鎖されてしまいました。夏休みが明けると、突っ込んだ話をする同級生も見つかり始めていて、そこから分かったのは、入学式後（あの学長の祝辞を始めとして）、私が感じていた大学への違和感と失望感は決して私だけのものではなく、表面には出ずとも多くの学生たちが共有するものであったということでした。東大の場合は医学部の登録医制度や研修医制度の問題、日大の場合は不透明な経営体制の問題、東京教育大は筑波への移転問題、そして後発の東外大は学寮建て替えの問題など、直接は具体的で個別的な問題から出発して、間もなく全学的な「闘争（紛争）」にまで拡大したのですが、そこには学生たちの大学への強い違和感や失望感があったことは疑いありません。更に1968年当時、国外では東西冷戦とベトナム戦争が激化し、国内では経済の高度成長と共に政治の金権化と腐敗が進行し、各地で公害問題が顕在化するなど、様々な形で若者たちは不安に陥れられ、また怒りに駆り立てられていたのです。この学生たちの不安や怒りを、サークルやアルバイトやコンパなどの方向に逸らさせることなく、正面から受け止め、一緒に考え学ぼうという姿勢を打ち出してくれる教師たちはまず殆どいませんでした。ごく少数はいたとしても、残念ながら学生たちを再び教室に連れ戻し、教壇に向かわせる力とはなり得なかったのです。教授や助教授たちが追い払われ封鎖されたキャンパスに立ち、晴れ上がった秋空を見上げ、私は得も言われぬ解放感を味わったことを覚えています。これは私だけのものではなかったはずです。

「解放空間」の現実

ところがこの解放感は一瞬にして消え、新たな違和感と失望感、そして空虚感が襲ってきました。「解放」されたキャンパスの内にあったのは、詳しくは説明しませんが、正に「混沌」そのものと、それと表裏一体の「空虚」でしかなかったのです。日本社会と世界への疑問と不安を抱え、教授たちの無力と無責任に怒り、大学封鎖にまで至った学生たちは、自らが闘い取った「解放空間」で、自らの未熟さと怠惰さからの「解放」を果たすことが出来ず、そこに現出させたのは「混沌」と「空虚」の空間でしかなかったのです。親しくなりかけた同級生たちともそれ以上語り合う機会はなくなり、それぞれが再びそれぞれの世界に戻ってしまいました。残されたのは「この混沌とは何なのか？」という新たな問いだけでした。

その後私は「大学闘争（紛争）」に積極的に参加した人たちや、反戦運動を戦った人たち

が、「俺たち、やったよな！」とか、「負けたけど、面白かったよな！」と語るのを、様々な場で何度も耳にしてきました。私はこれらの言葉に直接反論をすることはしません。しかし素直に耳を傾けることも出来ません。これら世の不正義と不条理に抗議をし、闘った勇気ある人たちは、あの「解放空間」を支配していたものが真の「解放」「自由」だと考えていたのでしょうか？ 彼らはそこに私が混沌と空虚のみを見出したことを、勝手な「ブルジョワ的幻想・妄想」だとして斥けるのでしょうか？ —— 私の内ではこの問いが、それに答えてくれる人は誰もいないまま、今に至るまで燻ぶり続けています。当時私には私を突き動かす幾つかの問いがあったのですが、あの「解放空間」は、それらの問いに対する答えを与えてはくれず、「この混沌とは何なのか？」という新たな問いを突き付けたただけでした。

新たな「大学生活」

「解放空間」の内を支配する混沌と空虚。東京の下宿に籠り本を読み続ける私に、小出先生が声をかけて下さいました。

「じゃあ君、暫らく僕の所で勉強をするか？」

それから大学院入学まで、延べで六年余り続くことになった新たな生活 —— 東京で読書とアルバイトを続けながら、時間のある限り故郷の三島に戻り、小出先生の許で勉強をさせて頂くという新しい「大学生活」が始まりました。私には東京と三島の行き来に新幹線を利用する金銭的余裕はありませんでした。しかしその分在来線の鈍行で読書の時間はたっぷりと取れ、下宿から家までの間で優に一冊は読み終えることが出来ました。この六年余りが私の真の「大学生活」であり、生涯の土台を作ってくれた最も貴重な時となりました。この新たな「大学生活」で、小出先生から私が何を教えて頂いたかについては次回のテーマとして、今は東京での「大学生活」について、もう少し振り返っておこうと思います。

二つの課題

大学に入学が決まった時のことです。小出先生から私は二つのことを命じられました。

- 一、本を読まない大学生など大学生ではない。四月から十二月の末まで、一日一冊は本を読むこと。
- 一、新しく始める語学を大学の悠長なペースに任せるな。一学期の内に文法は自分で全て終えてしまえ。夏には辞書を片手に、哲学の原書一冊を読み終えること。

小出先生は若者に大学への進学を勧めるものの、「アカデミズム」という場が実際には如何なるものかよく知っておいででした —— 「現代の大学生は遊ぶとよく言われる。しかし本当に勉強をする大学生は、昔もそんなに多くはなかった。君たちは勉強をするのだ！」。

また私たちは、よくこうも言われていました —— 「大学で君たちがすることは、まず語学を学び、良き友を見つけ、あとは本を読み、思索をすることだ。それ以外に何があるのだ？！」。このような「町の英語塾」以来の指導の背景があり、また自分の問いを抱え、私は大学の緩い雰囲気^{ゆるぎ}に違和感を覚え、あちこち「眼付け」などまでして歩いたのです。

二つの課題をこなすことは大変でした。しかし大学への違和感と失望感が、私を「一日一冊」の課題をこなすことに集中させたのでした。「辞書を片手に、哲学の原書一冊読了！」という課題は、夏の三カ月の間に、どうにか終了しました。取り組んだのはベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』でしたが、小出先生のアドバイスで、四月から丸善に注文をして、予め取り寄せて貰っていたのです。六月末から取り掛かり、一ページの一行目から単語を一つ一つ辞書と首っ引きで調べ、ノートに記してゆきました。その「単語帳」二冊は今も原書と共に田舎の書庫に残っています。九月の初め、ベルクソンを一応読了した時、或る達成感が訪れたことは事実です。しかし今も覚えています、ベルクソンを通してフランスの現代哲学と古典哲学の測り知れぬ広さと奥行きに触れたことで、私はむしろ自分の語学力や知識の乏しさに強い焦燥感を覚えたのでした。この達成感と焦燥感を抱えて、私は二期の大学に戻ったのです。(この時私は、この夏本当に勉強してきたと思える同級生二人と出会いました。この二人のことは次回にお話をしたいと思います)。しかし我々を待っていたのは、先にお話をしたように、「大学闘争(紛争)」という嵐、新たな「混沌」だったのでした。

「混沌」との直面、ドストエフスキイとの出会いへ

大学入学から「大学闘争(紛争)」へ。そして夏休みへ。話が前後し、また様々な方向に拡がってしまいました。ここで最後に「この混沌とは何なのか？」という問いを、もう一度確認しておきたいと思います。

浪人時代、私が東京で得た印象がまずは「混雑」だったとすれば、大学入学後、夏休みの前にもその後にも私が出会ったのは、大学ばかりか日本と世界の、更には人間精神の「混沌」と、その底にある「空虚」だったと言うしかありません。この現実を前にして、私の内に生まれたのが「この混沌とは何なのか？」という問いでした。そしてこの混沌と空虚に対する答えの試み、と言うよりは、この混沌と空虚の内にいる私に向かって指し出されたのが小出先生の救いの手であり(「じゃあ君、暫らく僕の所で勉強をするか?」)、東京と三島を往還しての勉強の開始でした。そしてこの中で、私はドストエフスキイと出会ったのです。

5. 「神はあるのか? 不死は存在するのか?」

— 「ロシアの小僧っ子」と聖書との出会い —

「混沌」と「空虚」、「ロシアの小僧っ子」との出会い

「東京には何があるのか？」——先にお話をしたように、東京の大学の「解放空間」もまた、新たな混沌と空虚が支配する世界でしかありませんでした。最早大学に行く意味を見出せなくなった私は、小出先生が呼びかけて下さったのを機に、秋から故郷と東京の往還を繰り返しつつ、先生から与えられていた二つの課題の内、まずは「一日一冊」に集中しようと、手当たり次第に本を読み漁りました。その核となったのがドストエフスキイの作品群でした。彼の作品は長編が多く、それまで「一日一冊」の対象としては、なかなか手が出せないでいたのです。

小出先生が常に話題にされていたドストエフスキイとの、いよいよ正面からの取り組みが始まりました。私が最初に手に取ったのは、以前からタイトルに魅かれていた『白痴』でした。「キリスト公爵」とも呼ばれる主人公のムイシュキン公爵。この「白痴」たるムイシュキンの魂の純粹さと、彼を巡って繰り広げられるドラマの激しさと悲劇性は、作品の背景をなすH. ホルバインの衝撃的な絵画「死せるキリスト」と相俟って、私の心を揺り動かしました。身体が「金縛り」のようになり、胸も鳴り、時間が来てもアルバイトに出かけられなかった日もありました。「ドストエフスキイ経験」とはこれかと思いました。

東京では、手に入れた文庫本を手あたり次第に読み、故郷では、真夜中でも小出先生のお宅に駆けつけ、その感動と感想を報告し続ける私を、いつも「よォッ！」と迎えて下さる先生は、嬉しそうに耳を傾けて私の質問にいつまでも答えて下さいました。東京と三島を往還しつつ、熱に浮かされたような新たな「大学生活」が始まったのです。

数か月間にわたる、このいわゆる「ドストエフスキイ経験」の中で、私を最も驚かせ感動させたのは『カラマーゾフの兄弟』の次男イワンでした。世に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちを凝視し、神の世界の不条理を弾劾するこの青年に心を揺すぶられると共に、この時私は、彼が弟のアリョーシャに語る次の言葉に息を吞まされました。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるのかとか、不死は存在するのかとかいう世界的な問題なのだ」（『カラマーゾフの兄弟』第五篇第3章）

「神はあるのか？」「不死は存在するのか？（永遠の生命はあるのか？）」——世の不条理に憤ると共に、このような問いを「飲み屋でわずかな時間を捉えて」論じ合う若者たち！——私が大学に入って探し求めていたのは、正にこのような「ロシアの小僧っ子」だったのです。「神」を求め「不死」を求め、これらの問題に命を賭けて生きる若者たち。私は「日本の小僧っ子」でしたが、「ロシアの小僧っ子」にもなろうと思いました。

「神と不死」

ところでイワンの言葉に感動はしたものの、「神と不死」という言葉自体は、私には決して

親しいものではありませんでした。尤も「神」と「不死」の中で、「不死」という言葉の方には問題を感じませんでした。祖父の死と祖父を焼く炎との出会いを契機として、小出先生から「この炎を超えるものはあるのか?」「死を超えた永遠の生命はあるのか?」という明確な言葉・問いの形で、既に死と不死の問題はハッキリと自覚させられていたからです。しかし「神」とか、更には「聖書」とか「イエス」とか「十字架」という言葉は、未だ私には遠いところに存在するキリスト教固有の「用語・概念」でしかなく、小出先生のようなクリスチャンの方たちが専ら問題とするものだと思われていました。私の頭も心も共に、なお島国的な呑気さと怠惰さの内に留まっていたのです。これらの用語・概念に対して、ドストエフスキやパスカルとの取り組みと共に、自分の意識が如何に目覚めていったかについては、なおこの[5]から次回[8]までの主なテーマとしてお話をしゆこうと思います。(更に次回、小出先生の許での「大学生活」について取り上げる際、明治初年からのクリスチャン家系の三代目である先生が、それゆえに突き当たった信仰と哲学の問題についても、改めてお話をする予定です)。

年の暮れ。ドストエフスキとの初めての取り組みの最後となる『カラマーゾフの兄弟』を読み終えた時、私はイワン以外にも、彼の弟である主人公アリョーシャに心を揺さぶられ、その魂の純粋さと崇高さに涙が止まりませんでした。小出先生がよく語られていたアリョーシャとその師ゾシマ長老の「聖性」に、そしてそれを小説世界に表現し得るドストエフスキの「力」に心から驚かされました。殊にアリョーシャが長老の死を契機として与えられる回心経験は圧倒的でした。そこに働くキリスト教的救済の構造については、この時の私には未だ十分に理解出来ませんでした。少なくともこの場面はドストエフスキが、私が東京で見出した混沌や空虚を超える「光」を、そして祖父を焼いた炎を超える更に強烈な「炎」を知る人であり、かつそれらを描く力のある作家であることを確信させるに十分でした。私はその「光」と「炎」が拠って来たるものを確かに知りたいと思いました。「神」という言葉が、ドストエフスキを通して、初めて自分の心に或るリアリティを以って入ってきた時だと思います。

三島に帰り、ドストエフスキを生涯学びたい、イワンやアリョーシャのような「ロシアの小僧っ子」になりたい、あの「炎」と「光」の源を突き止めたいたいと報告した時、先生は深く頷いて下さいました。かくして「この炎を超えるものはあるのか?」という問いは、今までお話をしてきた幾つかの問いと合流し、新たに「神と不死」を巡る問い、「神はあるのか?」「不死は存在するのか?」という問いとして、私の心に住み始めることになったのです。

以下では、新たにこの問いを抱えて東京と三島を往還しつつ、私がその後大学院で本格的にドストエフスキとそのキリスト教思想と取り組むに至るまでの、主に東京での「試行(思考) 錯誤」を振り返っておきたいと思います。「ロシアの小僧っ子」イワンやアリョーシャとの決定的とも言えるべき出会いを果たした後も、小出先生の許での勉強を続けながら、私はなお「神」とか「聖書」とか「イエス」とか「十字架」という言葉・概念の理解に向けて、様々な「行きつ・戻りつ」を繰り返す「田舎者の小僧っ子」だったのです。宗教学を学

ぶ皆さんに、この「行きつ・戻りつ」のお話が参考になることを願っています。

新たな問いと「試行（思考）錯誤」、ロシア精神の奥深さ

「大学闘争（紛争）」は、学生によって封鎖をされていた各大学の構内に次々と機動隊が導入され、「終息」を迎えました（1969）。しかし既にお話をしたように、その前から私は大学には殆ど行かなくなり、下宿でひたすらロシア文学を読み漁り、そして三島の小出先生の許に駆けつけるという生活が始まっていました。

具体的にはドストエフスキイの作品を繰り返し読みながら、神田で手に入れたプーシキンやゴーゴリ、トルストイやツルゲーネフ、そしてアンドレーエフやアルツィヴァーシェフなどへと読み進めてゆきました。これらの卓越した作家ばかりか、小出先生に教えられ、ロシアにはシェストフやメレジコフスキイやベルジャエフなど、ドストエフスキイの精神を深く鋭く受け継ぐ思想家・評論家たちも存在することを知った時は、「ロシアの小僧っ子」たちの底知れぬ精神性を実感させられ、もし自分がこのままこの世界を知らずに生きていったならば、自分は本当に「田舎者の小僧っ子」で終わってしまうだろうと思い、ゾッとしました。下宿と神田と三島を往還してのロシア文学・評論の乱読は、ドストエフスキイとそのキリスト教思想と取り組む上で、かけがえのない下地となったと思います。

ところでその後私は、主宰するドストエフスキイ研究会で、「先生はドストエフスキイ以外にも、トルストイなどは読まれるのですか？」という類の質問を少なからずされてきました。若者の負担を慮って、トルストイなどには余り言及していなかったのです。ロシア文学・評論が競って読まれた大正・昭和の時代から、残念ながら現在は精神的に盤沈下が驚くほど進んでしまい、人口減少よりも遥かに深刻な問題がここには存在することを指摘しておきたいと思います。神田の古書店街の、たとえば田村書店に足を運んでみて下さい。かつて日本人がロシア人の精神性の深さに如何に熱い目を向け、如何に多くの文学・評論を翻訳していたかを知り、また書店の御主人が現状を如何に深く嘆いておいでかを知り、皆さんは心を揺り動かされることでしょう。

パスカルの「火」

ロシアの文学・評論を読み進める一方、私は小出先生の「辞書を片手に、哲学原書講読」という課題も忘れてはならないと思い、ベルクソンの後はフランス哲学・宗教の古典、デカルトとパスカルに少しずつ取り組んでゆきました。デカルトの知性の鋭利さもそうでしたが、殊にパスカルの『パンセ』と「覚え書」は、その精神性の深さで私を驚かせました。

パスカルの『パンセ』は、「栄光」と「悲惨」という人間の両極性の徹底的分析から、イエス・キリストを介し、人間の目と心を神に向かわせるという目的の下に書かれた見事な書物（「キリスト教弁証論」としての断片集）で、私はここにもまた「ロシアの小僧っ子」ならぬ「フランスの小僧っ子」、「神と不死」の厳しく真摯な一級の探求者が存在することを知らされました。ドストエフスキイとパスカル。私が求めていることに正面から応えてくれる

巨人たちがいること、そして彼らの思索の土台がまずは聖書世界、殊に新約聖書の四福音書にあり、その焦点はイエス・キリストに絞られること、そしてこのイエス理解から神に向かうという、キリスト教的認識の基本的な構造もしい次第に理解されてきました。

何よりも私が驚かされたのは、パスカルの死後に発見された「覚え書」です。彼は自らの回心経験を羊皮紙に書き記し、胴着に縫い込んであったのですが、私の目に飛び込んできたのは、最初に記された「火 (feu)」という一語でした。数行先には「確か、確か (certitude, certitude)」という言葉が二度記されています（「確か、確か、感情、歓喜、平安」）—— 私はパスカルが、私の祖父を焼いた炎を超える「火」と出会ったこと、その「火」が「神」であり、死を超える「永遠の生命」であることを確信しました。ここにはイエスを通して神に至るというパスカルの信仰の精髓も簡潔直截に記されていて、私はパスカルの『パンセ』を卒論のテーマとして選び、ドストエフスキイの作品と並行して、二年ほど取り組みました。

話が少し先に飛びます。パスカルで卒論を書いた後、私はドストエフスキイを描いて、別の大学の大学院でこのまま暫くパスカルを学ぼうと、その試験を受けたのでした。ところが面接試験に臨んだ時のことです。パスカルを専門とする高名な教授は、私がパスカルとの取り組みで何を考えてきたか、これから何をしたいかについては一切質問をされず、テキストは何版を用いたか、この研究書は既に原書で読んでいるか等々の専門知識をひたすら問うてこられたのです。私は十分に答えられず、ラテン語も未修でした。ドストエフスキイについて語ろうとしましたが、聞いて貰えませんでした。大学院で必要とされる「パスカル学」への基本的な準備もせず、ドストエフスキイを語る資格などなかったのです。不合格は当然でした。私の姿勢に「迷い」が、より厳しく言えば「誤魔化し」があったのです。

一方でドストエフスキイにあれば感動をし、生涯の課題だと思い定めておきながら、新たにロシア語を学び、大学院でのドストエフスキイ研究に備えるには時間がかかり過ぎると思い、取り敢えず暫くはフランス語で済ませ、大学院でパスカルを学んでおこう、その間にロシア語も学ぼうと思ったのです。小出先生は、ドストエフスキイの前にパスカルと向き合い、パスカルの角度からキリスト教思想を学んでおくのも精神の奥行きを得るために良いだろうと、ゆったりと鷹揚に構えておいででした。しかし自分の安易さと中途半端さ、二股をかけた邪心に、パスカルとドストエフスキイ二人から罰が下ったのです。

江川卓先生との出会い

大学院の不合格は、私に自分の進路について厳しい再考を迫りました。私は一年間留年をし、様々に迷った末に、やはりまずロシア語を学び、大学院でドストエフスキイを学ぶべきだと判断をしました。そのために一度大学を出て、アルバイトで生計を立てながら、二年間マヤコフスキー学院に通うことに決めました。遅まきながらの背水の陣です。

マヤコフスキー学院とは、大学とは離れて自由にロシア語・ロシア文学を教えたいという先生方が東中野で始められた小さな学校で、江川卓先生や水野忠夫先生や安井侑子先生・渡辺雅司先生を始めとする先生方は皆、人間味に溢れた熱心な方たちばかりでした。「大学

闘争(紛争)」の「混沌」の中から生まれた素晴らしい一つの結実です。皮肉なことに私は、大学を出て初めて、大学の先生方の許で真剣に勉強をしたのです。大学院入試に必要なロシア語を週一回の授業で、二年間の内にマスターしてしまおうという必死さもありました。

江川卓先生は私の夢をお知りになると、キリスト教を土台としたドストエフスキイ研究は日本では乏しい。是非この道を貫くようにと、熱く励まして下さいました。しかしその後私は、ドストエフスキイと聖書との取り組みに余りにも多くの時間がかかり、江川先生の許をお尋ね出来ないままにいました。先生の「謎解き」シリーズの出版予告を見るたびに、「謎解き」という言葉を切り口に、次々とドストエフスキイ世界に分け入ってゆかれる先生が、『カラマーゾフの兄弟』論では「神と不死」の問題という最大の「謎」をどう解かれるのかと、私は出版の日を楽しみにしていました。ところがその感想を述べにお伺いしない内に、先生はお亡くなりになってしまったのです。

恐らく私は、先生の「神と不死」の問題に関する「謎解き」に対しては、仮に先生がなおご存命で、お会いすることが出来たとしても、少なからず異を唱えることになっただろうと思います。そこには私が学んできた、そして理解するドストエフスキイのキリスト教とは、余りにも違うキリスト教理解の世界が展開していたのです。しかしそのような時も先生は、この不肖の教え子の異論にもあの変わらぬ笑顔で耳を傾けて下さったに違いありません。マヤコフスキー学院での二年間は充実した楽しい修行期間でした。この未熟な私を温かく受け入れ、励まし鍛えて下さった全ての先生方に感謝をしています。

三島の小出先生の許には、ロシア語の勉強とアルバイトのため、以前ほど頻繁にはお伺い出来なくなりました。しかし先生の許での勉強が核であることは変わりませんでした。

荒井献先生と聖書学との出会い

大学院は東京大学の比較文学・比較文化学科に入りました。ロシア文学科や哲学科を選ばなかった理由は、自分をロシア文学や哲学の枠に閉じ込めず、ドストエフスキイを核に聖書や宗教・芸術・文学などを幅広く自由に学びたいと思ったからです。所属学科の自由な学風に甘えさせて頂き、私は「比較」の対象を「ドストエフスキイ文学と福音書文学」と定め、授業はロシア文学を担当される川端香男里先生と、西洋古典学科の荒井研献先生のゼミを中心に組み立てました。「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」になろうという願望は、私をドストエフスキイのキリスト教、殊にその聖書理解の研究に向かわせ、そのためにもドストエフスキイと聖書、両テキストとの取り組みをまずは第一の課題としたのです。

ドストエフスキイに於けるキリスト教、殊にイエス像構成の重要性は、既に小出先生の空間では自明のこととされていました。所属する比較関係や露文関係に於いては、このことに注意は殆ど向けられず、少なからず当惑させられましたが、この重要性を改めて強く自覚させられたのが、荒井献先生のゼミでした。荒井先生の新約聖書学とは、その数年前に出版された『イエスとその時代』(岩波書店、1974)からも明らかなように、イエスに関わる伝統的・主観的信仰の前提を一度全て捨て去り、まずは「イエスとは誰か?」、この単純な

問いを出発点として、人間としてのイエス像を歴史学的文献学的かつ批判的に構成しようとするところに最大の特色があると言えるでしょう。たとえ我々が如何に魅力的なイエス像を見出したと思っても、テキストに即して歴史学的文献学的な証明がなされない限り、この土俵では恣意的かつ主観的信仰の表明だとして斥けられるのです。

小出先生はその半世紀前、京大哲学科で西田幾多郎教授に師事されると共に、宗教学担当の波多野精一教授の下でも学ばれ、この時からブルトマンを始めとする新約聖書学に注目され、イエス像の構成を最大の課題とされてきました（「イエス像の構成」1942）。それから半世紀近くが経った1970年前後、八木誠一・田川建三・荒井献・佐竹明という気鋭の聖書学者たちのイエス研究が次々と発表されると、それらを非常に評価され、先生の許で学ぶ私の友人佐藤研君を励まし、荒井先生の許での新約聖書学の研究に送り出されていたのです。小出先生は私も荒井ゼミで学ばせて頂くことを勧められ、佐藤君の紹介もあって、荒井先生は私をゼミに迎えて下さったのでした（佐藤君は、夏明けに私が出会った二人の真摯な同級生の内の一人です。彼らが小出先生の許で勉強をするようになった経緯は、次回にお話をします）

荒井先生の新約聖書学のゼミでは、佐藤研君やその先輩の大貫隆さんたちが聖書テキストに臨むに当たって、そしてイエス像の構成にあたって、実に厳しい歴史的客観的な批判的考察を要求されました。ゼミの発表を前に食欲をなくし、神経をピリピリさせていた佐藤君の顔を昨日のように思い出します。不十分な準備のため、日頃温厚な荒井先生から顔を真っ赤にして怒鳴られ、泣き顔になった院生もいました。『罪と罰』のマルメラードフから「信」の本質を教えられたと言われる先生は、私がドストエフスキイを学んでいるということでゼミに迎えて下さり、私には新約聖書学を専攻する院生の皆さんと同じ厳密さは要求されませんでした。ここ数年間で学ばされたことは測り知れないものがあります。

荒井先生や佐藤君や大貫さんを始めとして、新約聖書学に取り組む人たちの多くは、ドストエフスキイの大変な愛読者です。ここでの経験から私は、ドストエフスキイ研究は新約聖書学に学ぶことによって、ドストエフスキイ世界のより深い理解を可能とされ、逆に新約聖書学もドストエフスキイ世界に学ぶことによって、より豊かで深いイエス像の構成が可能となるということを確認させられました。「聖書熟読といふ経験」（小林秀雄）を土台としてドストエフスキイ世界に触れる新約聖書学者と、「ドストエフスキイ熟読といふ経験」から聖書世界に分け入るドストエフスキイ研究者——これら両者が今後次々と生まれ、イエス像の構成を核として相互の交流が自然になされる日の来ることが切に望まれます。私が若い人たちに期待をし、ドストエフスキイ研究会を主宰して来たのはこのためです。これからの私の仕事も、更にここに的を絞ったものとなるでしょう。

イエス像の構成、そして日本人の島国性

新約聖書学に触れることが出来たことは、ドストエフスキイの聖書テキストに対する姿勢、殊に彼のイエス像の構成について理解する上で大きな参考になりました。次回のために、また宗教学を学ぶ皆さんのために、そして日本に於けるドストエフスキイ研究の将来

ためにも、このことについてもう少しお話をして、前半の終わりとしたいと思います。

シベリア流刑中のドストエフスキイが、最初の四年間、懲役囚として読むことを許されたのは新約聖書だけであったことはよく知られた事実です。このシベリアに於ける「聖書熟読といふ経験」から始まり、ドストエフスキイがイエス・キリストについて、そして「神と不死」の問題について記す時、問題が抽象的に論じられることはまずありません。彼の念頭には聖書テキストの何れかの箇所が必ず置かれ、そのイエス像を基に思索が展開されると考えてよいでしょう。これもよく知られたことですが、ドストエフスキイの思索は「否定と肯定」「信と不信」の間で絶えず揺れ動き続けました。これと呼応して、彼はイエス・キリスト像を作り上げては突き崩し、また挑むという、熾烈なイエス・キリスト像構成の「試行（思考）錯誤」を生涯続けたのです。正にこの事実こそ、彼をして言葉の真の意味での「キリスト教作家」「キリスト教思想家」たらしめていると言うべきでしょう。

ここから日本のドストエフスキイ受容におけるキリスト教、殊にイエス像の扱いについて、私の限られた知見でしかありませんが、一言述べさせて頂こうと思います。明治期以来、日本に於けるドストエフスキイの読者・評者・研究者に共通するのは、まずはこの作家に対して示してきた類まれな愛と情熱であることは間違いないでしょう。しかしその一方で、ドストエフスキイが生涯あれほど問題とし続けたキリスト教と、その核となるイエスという存在に対しては、敢えて言えば、変わらぬ吞気さと怠惰さと島国性の内に留まり続けてきたことは否定出来ないように思われます。

この半世紀私が触れてきたドストエフスキイ研究で、聖書テキストとの正面からの批判的取り組みを土台としたものは殆どありませんでした。つまり「ロシアの小僧っ子」としてのドストエフスキイ、シベリアに於ける「聖書熟読といふ経験」を経てきたドストエフスキイを正面から受け止め、研究者自らが「神と不死」の問題と取り組み、聖書テキストとの格闘をした上でなされた研究書はまず見当たらないのです。たとえこれらの問題について言及をしたとしても、ドストエフスキイが聖書テキストの何処と、また何と向き合い、そこから如何なる思索を展開したのか、またドストエフスキイが聖書から如何なるイエス像を掴み取り、それを後の作品に於いて、肯定の方向であれ否定の方向であれ、如何に展開していたのか、系統的で批判的な検討をした論考は見られません。「ロシアの小僧っ子」ドストエフスキイとの正面からの「対話」「対決」が、そもそも成立していないのです。

ソビエト政権が崩壊したロシアでは、今や「旧き良きロシアとその信仰」が復活しつつあると言われます。しかし私の知る限り、ドストエフスキイ研究に於いては、イエス・キリストを核とする彼のキリスト教信仰についての理解を、「我こそ本家本元」として前面に押し出しはするものの、上に述べたようなドストエフスキイの新約聖書との厳しい取り組みを批判的に追い、そのイエス像構成の「試行（思考）錯誤」を十分に理解したところからの研究は未だしの感があります。しかし私は、ロシアの研究者たちがやがて、ドイツに発する新約聖書学の厳しい洗礼を受け、その方法論と成果をドストエフスキイ研究に生かし、「旧き良きロシアとその信仰」を真に復活させる可能性を持つと考えています。なぜならば少な

くとも彼らは、「旧き良き」信仰の立場から、聖書との取り組みを重ねる「ロシアの小僧っ子」であることは止めていないからです。日本に於いてもドストエフスキイの読者・評者・研究者が、まずは自らを「聖書熟読といふ経験」の中に置くことから始め、新約聖書学に触れることも厭わず（日本には素晴らしい研究者が多いのです）、やがてそこからイエス像の構成を巡るドストエフスキイ生涯の苦闘に目を向けるようになることを願わずにはいません。

宗教学を志す若い皆さんも、その具体的な専門が何であれ、日本に於けるドストエフスキイ受容が持つ問題を「他山の石」として、是非聖書テキストへの注意は怠らないようにして頂きたいと思います。私の長い「試行（思考）錯誤」が、少しでも参考となって貰えるならば嬉しく思います。この問題は次回も、改めて別の角度から取り上げたいと思います。

（前半 了）

《付》

★小出次雄略歴

- ・ 1901 三島に生まれる。家は代々の地主で質屋を営む。明治の初め、宣教師 J. バラが三嶋大社の鳥居前で布教をし、人々から石を投げられているところを祖父の市兵衛が保護して匿い、その縁でキリスト教に改宗。続いて一族も改宗をし、キリスト教教育を施すバラ女学校を設立。以来小出家は三島キリスト教会の長老的存在としての伝統を持つ。
- ・ しかし幼児洗礼と型に嵌った信仰に留まることをよしとせず、堅固な机の手応え以上の神感覚を得るべく、東大の井哲^{いのてつ}を嫌い、一高から直接京大・西田幾多郎の許へ。カントの批判書を読了後、カントを捨て静座に徹し、数年後決定的な神経験を与えられる。京大を卒業後、同志社大学で教え始めるもすぐに退職。柳宗悦を仲人として満鉄総裁・仙谷貢家の婿に入る。師の西田幾多郎や旧友と交流を保ちつつ、一人在野で哲学・宗教・芸術の研究を続ける。離婚後は吉祥寺に住み、自由学園でも教えると共に、思索・芸術創作に打ち込む。この時期に「イエス像の構成」を始め様々な芸術論や絵画を残す。
- ・ 太平洋戦争の勃発と共に、バルトの原典講読で牧師たちを指導。やがて戦争の激化と共に、故郷三島近くの江間村に疎開。戦争終結と共に「聖髑（髑髏）塾」を開き、地元の青年・農民に聖書を指導。「ゴルゴタ論」や「落葉讃歌」を完成させる。その後三島に戻り、研究と執筆活動を続け、「竹の子」（資力）が尽きて竹林路に塾を開く（後略）。1990 没。

（文責・芦川）

[以上は当日の配布プリントに一部加筆をしたものです。小出先生については今回の各所で言及をし、次回の[6]と[7]でも様々な形で言及をします。先生の「選集」を少しずつ準備していますが、その完成の暁には、更に詳しい「略伝」も記す予定です。次の「参考文献」もご参照下さい]

・参考文献 [本文に関係あるものに限定しました]

小出次雄関係 [各項末尾の [] 内が執筆年]

- ・「宗教の妥当根據」(京都大學・純正哲学科・卒業論文)、[1927]
- ・「イエス像の構成」(未出版)、[1942]
- ・『落葉讃歌』(私家版、1978)、[1946]
- ・雑誌「^{ゴルゴタ}聖體」(1)(2)(3)、(ガリ版刷り)、[1949]
- ・『基督教空間論としての ^{ゴルゴタ}の論理』(驢馬小屋出版、1984)、[1949]
- ・「しわくちやな五ルーブリ」(雑誌『心』7月号、平凡社、1956)
- ・『内村鑑三』(国土社、1965)

新約聖書学関係

- ・八木誠一『新約思想の成立』(新教出版社、1963)
- ・田川建三『原始キリスト教史の一断面 福音書文学の成立』(勁草書房、1968)
- ・荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』(岩波書店、1971)
- ・佐竹明『新約聖書の諸問題』(新教出版社、1977)
- ・大貫隆『イエスという経験』(岩波書店、2003)
- ・佐藤研『悲劇と福音—原始キリスト教における悲劇的なもの』(清水書院、2001)

芦川関係

- ・『^お隕ちた^{にがよもぎ}苦^{ほし}艾の星—ドストエフスキと福沢諭吉』(河合文化教育研究所、1997)
- ・『「罪と罰」における復活—ドストエフスキと聖書』(同上、2007)
- ・『ゴルゴタへの道—ドストエフスキと十人の日本人』(新教出版社、2011)
- ・『カラマーゾフの兄弟論 砕かれし魂の記録』(河合文化教育研究所、2016)

芦川のイワン論 (→ 次回・[8]の参考資料として)

1. 『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』前編V、後編ⅦBC
(河合文化教育研究所、2016)
2. 「ドストエフスキと現代 — アポカリプスの予言とその行方 —」
(雑誌『キリスト教文学研究』、33号、日本キリスト教文学会、2016)
3. 「ドストエフスキ研究会便り(5)~(7)」
殊に(7)『「一粒の麥」の死の誓え—『カラマーゾフの兄弟』におけるユダ的
人間論とイワン —」(河合文化教育研究所 HP、2017)
4. 「イワン・カラマーゾフのキリスト — 「大審問官」、福音書からのアプローチ —」
(雑誌『ドストエフスキ広場』No. 26、ドストエフスキの会、2017)
5. 「ドストエフスキ研究会便り(10)」
カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々 — (3)
「イワンの「生涯で最も卑劣な行為」(河合文化教育研究所 HP、2019)

次回「ドストエフスキ研究会便り（１８）」について

「様々な問いとの出会い」後半は、今回に続いて第6の問いから第8の問いまで、残り三つの問いについて扱います。

「今この絶対のリアリティを掴めているか？」、この[6]の問いと共に、小出次雄先生の許で具体的にどのような勉強が続いたのかを報告し、次に「何が現実を変え得るのか？」、この[7]の問いと共に、自分は社会とどのように向き合ったのかを報告し、最後に私が人生で出会った最大の問い・謎である、十字架上でイエスが死の間際に上げたと言われる叫び：「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし？」（マルコ十五 34）、この[8]の問いについて取り上げたいと思います。

殊に次回の[8]では、六年前の講演をほぼ全面的に加筆修正し、「神」・「聖書」・「イエス」・「十字架」—— これら我々日本人が遠ざけて馴染もうとしないキリスト教の核心となる言葉・概念について、『カラマーゾフの兄弟』のイワンが如何に胡麻化さず正面から取り組んだかを追いたいと思います。このことは、私が小出先生の許で歩んだ「試行（思考）錯誤」の報告の纏めとなり、また何よりもイエスという存在と、その最後の絶叫・問いが持つ意味を浮かび上がらせる手掛かりとなるように思われます。